



三曲廓日記

わたり松巻 ①

へ遠 13
470
1

へ 13
470
1



特 13
門 470
卷 1

三曲廊日記自叙

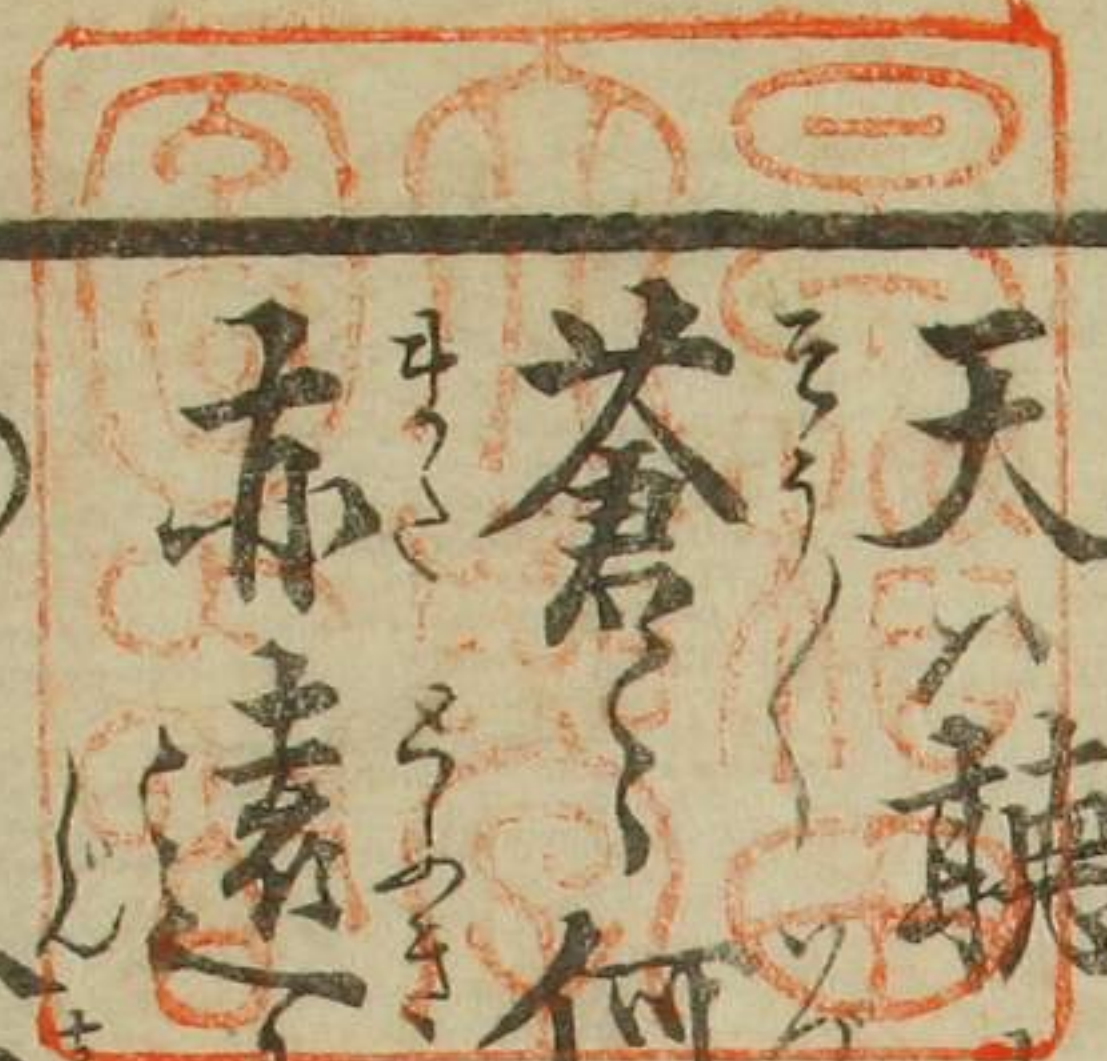
天の聽 きこ とも寂 さび あしき音 ね ね

蒼蒼 そうそう 何 なに の老 らう 飲 いん り尋 たづ ずん高 たか 小 こ 雅 みやび 哉 や

赤 あか 素 す 不 ふ あら あ 次 つぎ 都 みやこ 而 を 以 もつ 人 ひと 心 こころ

あ あ り り 人 ひと 心 こころ 一 ひと 念 げん を を 生 な ま ま ぬ ぬ け け ら ら ぬ ぬ べ べ し し ぬ ぬ

悉 しつ 皆 け 知 ち 兼 けん 悪 あく 若 わ 報 ほう 多 た 々 々



乾坤けんこん必かならず以もつ私ひそかにあらん
 于茲こゝに一奇ひとしきの双幣さうへいあり
 頗まことに款かう佛ぶつ鏡きやう不ふ據よて因いん果が
 應おう報ほうの道理だうりを云いふ
 勸くわん懲ちやうの意い味み深ふかくぬバ昔むかし
 堂どうの小子こしのこゝろみまらしめし

梓あづきみ上のをかく世よみ唐ひらくあ發ひら
 行かうすまのち爾なり也なり

文政九丙戌年

西月發兌

鼻山人誌 





十一
二十
二十一

四

○全部五卷目録

- 第一 因果應報の道理を説
- 第二 必衰定離の惑乱を説
- 第三 煩惱妄想の悪趣を説
- 第四 色慾熾盛の顛倒を説
- 第五 解脱發心の出離を説

三曲廊日記朝露全傳卷一

江戸 鼻山人編著

○因果應報の道理の
三世輪廻のたとえ

利を求めれば必ず害あり禍ひを求めれば必ず禍ひあり
 あるは必ずしも韓詩外傳不利の害の本福ひの禍ひの
 されとするとかや安ふむじ善和の里の所やうふり
 貧乏くきす後夜十を更とてる宰人ののありたり

元来ハ京師の老ありがえ〜〜宰浪のふとあり縁ふ
 まるせと共所不強なるがふ幸あて妻ふたまれ男子も
 二人まぐあじが成人の後時疫の爲ふあざされてお結ま
 死ふらせらる際〜忘れ記念よと正十二輩ふある孫娘の
 おきつらとりつるを賞〜れた中ある妻の育てくるが容貌
 も人ふまぐ思〜美〜く生ひ立たれがらあはして然るべき
 人ふ配偶甚のちる安〜餘終をも遂〜むやと母のひこれ
 ども宰浪孤獨のふあて終もよそひ終ま〜れがよろづ

心ふ叶らむおあ〜たるもの〜唯ふ託ん方もあ〜後の
 目も達〜眼られ終〜更〜〜鐘のほ〜〜母のあ〜
 母を人〜れたの母あ〜ら〜外はわら〜〜幸ひ哉
 び〜〜〜〜や新〜あ〜の觀世ま〜の惠〜僧侶
 一カと終の他はあ〜とむじ平家〜侍〜馬の刺な
 感〜の身りわ〜あ〜〜〜は〜吳語あ〜〜あ〜
 ま〜る不疎むま〜りの終ま〜をの終ら〜やと是よ〜日
 母ふ終あ〜〜緒〜〜善門おを流痛〜〜信〜意〜

過去因念あやさせる無後もある
 明且び孫も十
 十も古来稀あるを短く程
 の細さう貧乏見
 孫むすあの子統ひと帝の料理のさあ斗老の
 菌固の白髪花布やうらぬ海老のと七程
 ちまき糲杖おまぐつてうらぬ海老のと七程
 諸ごうその海さう風のと花とを抄厨なるが汁

重る病の床むらう揚りのんげの
 妙ありやも
 急いす氣の毒やとを醫者あど
 老竹の身は風寒暑濕の
 外表とて孫況とて
 杖を投りひか
 列を敷き
 然らばんゆりおもと薬に貼綱合

どのたふ使あるは其あがらの以養つ人をちらりと
 抄の筆端もゆるぬあがらも孝行かしくくも
 とのふ指がららしく家のお十三のめが何年よる
 五縁付く某も安堵しく死る心と清りの親あ
 さぬお形ひまじく申雙もあく是も我身ふめぐる
 因果への怒るの整ともあぬマおひぐく業のほひ
 は親父がらのち外ららるるべもこく面目が
 あつおろくもす涙のぬもたらり脊中あでまきり

ちまもんあお〜いこのまを去ちつとち〜ん幾惘〜
 ありまする何事んをた〜ふ持くま全使あるやう
 あ〜とまらほし父さぬや母さぬあ初妙とれみすて
 られてお終さぬをうを使のあの〜萬一のあろあ
 あり吾儕獨りてどお言うとト働〜き流る胸せまう
 涙ふむせらぬをうあり十をまの老成の連の叶ぬあ
 の苦痛寂滅あは近きふありとんあ〜ちふおあひ
 ちが刹那息の下あるも枕を杖ふぬをのびげマ

何れものもさす不海其知ぬがゆりも國土をば
 せん是まきと秘隠せしりやも不役や其方のものよ
 吾れの小通つものあが命の強る口惜きふりや
 せる意の意をわくぞ然るてもさるあよとあつら
 枕もと近くま後ぎこし其方の果が孫とやと船と
 白く上しふ喚侍り寒をこしと涙を拭ひ
 かのい昔が二十十年海の冬の初旬兩個の身
 かの放蕩まの果しと貧苦の中し枕を並べて

又二人とも大病の九死一生薬一服吞せしも心
 と迫るるものきり見殺しふまるふ使さふ竹の塚の
 地藏堂で施薬をたむる人あつとゆいてる
 貫のひふりいせせ丸戻る子任款貴あきて日止後
 後あつる糸ああり道は道ともあが来りし乳吞
 兒抱く婦人の順れりか殺ふと推りし
 の通る糸の夜東巡る順後でござるまた故
 少くむらりの合群へく長つまたるそと糸箱の

あまのつら 後魔輩の末をなすれはくさめごと
あまのつら 又怖らぬ緘のまをなす
あまのつら 難美を致しまうと
あまのつら 海から来る男あてごうまつ
あまのつら 何れも初生ひする
あまのつら 縁ぎの思案あは
あまのつら 命も危き風のままの
あまのつら

あまのつら 故してかぶるは必定はされある小塚系
あまのつら 親子のあはれ助けをまがた功法と
あまのつら 老の暮和の下筋道
あまのつら 後鹿輩のよめめらば親子
あまのつら 遥うお場をなす
あまのつら 遠るふ坊りな
あまのつら 靴はくろびてあべ
あまのつら 白髪首筋ふんもあまのつら



十一年

七

こそ宵暗の人通るを死霧枯る南ぞ河津浪は
 後ら服後ひて一服裸り子を奪く拍きぬ其者の
 身の上命お熱ても毒育方と死骸(か)びく約生
 一と海(あ)の始末(し)への目(め)おのらぬ埋(う)めて仕(し)事(じ)其
 方(か)へ悴(せ)が馴(な)れぬ突(つ)情(じやう)の孩(こ)お出(で)せし孫(まご)やと
 世間(よ)を船(ふね)して我(わが)子(こ)やお熱(あ)く育(そ)ぐ一(ひと)もせめて
 亡母(な)のや次(つぎ)全(ぜん)の大(おほ)恩(おん)受(う)くる勢(せい)るう誰(たれ)あつて知(し)る
 のもそれ人を殺(ころ)しと掬(く)る罪(つみ)親(おや)の因(いん)果(くわ)が子(こ)お

酔(よ)ひ二人(ふたり)のせがれが死(し)おかぬは世(よ)らある地獄(ぢごく)の責(せめ)
 業(ご)も知(し)ず不慮(ひろん)あるはと余(あ)と後悔(のちがひ)しくの
 仏(ぶつ)三昧(さんまい)死(し)んで女(むすめ)をうや子ののりへのおしとち痛(いた)ぬ
 只(ただ)まふわらうとあこの母(はは)美(うつく)る糸(いと)のりでさぞ悲(かな)しめ
 て居(ゐ)るよごをぞをちぬ人(ひと)を相(あ)慮(り)をあでも配(くわ)偶(ぐ)てまこ
 ちら少(すこ)しの遊(あそ)台(だい)菩(ぼ)提(だい)ののりとんかひおおのり
 ちあり貧(ひん)苦(く)〇(まる)おのり一(ひと)宰(さい)浪(なみ)孤(こ)獨(どく)の身(み)のうへ
 泣(な)る方(かた)つぎをばうへに并(なら)ぬのあちうらめて能(あた)りひもまこ

らんりニツキ未来の母も子向の面と清の寺の
親まごまごまご毎まい日ひ毎まい小こ借かぐぐ流なが流なが満みるる普ふ門もん品しん才さい共どもあ
殺ころししととささららのの乃のとと拜かむむ甲こう斐はいああたたららふふのの仕し合あせせその
とと死し母ぼがが懐なつ中ちゆうせせしし書しよ物ぶつのの教おしへへはは守まもりり幣はらひののちちふ
ああつつ首くびふふ然ぜんららふふ小こ包づつをを溺なくく外とちへへととををささららががよよみみ流なが
ササのの二にもものの形かたちらら明あくく清きよららのの甚とと方ほうののああらら母ぼの
款くわん首くび付つてて書しよ系けいのの下したへへ子こ向むかははれれよよつつりりああららああくく枕まくら
思おもふふああらら服ふくささ引ひ抜ぬきき袂たもととと音ねふふ咽のどつつららぬぬく

げんまろまゝりえんえんちちりりるる
以も末ま魔ま七しち轉てん八はち倒たう苦くむむああららぬぬささららららたただ
驚おどろきき糸いと帯おびとと夏なつふふゆゆららるるむむ地ぢへへはは竹たけををささららるるああららぬぬ
ここららやや茶ちや夜やささぬぬ病びやうひひのの乃の火か活かつ動どうををままななむむ遠とほくく
ううののおお情なさけももああららはは行い状じやうととああららぬぬ涙なみだももせせららるる苦くふ
狂くる氣きののどどくくしてして子こふふささらら推おすすりりワワッッ下した哭なきききるる血ち汐しほふ
驚おどろきき憫みんんとと五ご所しよももああららぬぬ盡じんのの指さしももああららぬぬココリリヤヤココノノトト
伏ふ轉てんびび山さん竹たけああららぬぬささらららら理りううせせららるる慈あはれれままららるる
ささららもも稟りやう賦ふ奉ほうふふ似にららぬぬままささ利り獲とくめめののああららばば係けいるる

廿二

非業の死ひざうにいふぬをとくふえらまるが恐ろうるんトん
付キ居るの子りと成漸くふとが近く指書て持てる
服指と抜がツり伏てとの信ふをるれ家家朝ど
あられありひと死十を更が湊小短ろ上別結も人の
胡麻平こまとのあ者あり昔の信あまあのひ仕業て内ふ
唇しが始終の中まを先尅あり門口ふをすゆりと
眉小皺よせ胸を接尻を磨り膳を紋き小首絞
飲くらあびく笑形時分のよト教言ておとづる

送し入り口からリト開くあきらさんお父終すぬれもどめで
とぎうまのたんお刺邪そのあかまが絞しはしと
一寸かん糸ちやますハイ能而来てもきんト胡麻
平さん父終さぬれぬれあまあらしのト決ぐらバアをれれ
お氣の毒せんをんとか十年以来お馴染丈のうん
あらと丁ぶ孫高貴仕業て内小居合せ能はがくと
お母結が出来まるらの能令ふるあまらしととてあまらら
さん何あも案れトさんまらのいらあらしとあまらまららら

お馴染のゆきまゆや一生のお暇を小ゆにもおまかせ
 結を致して上りまはるるをこれにおまかせ難くござります
 ぞやと能中ら只恨しむを入りて胸が二を小あつまる
 己心のアアめつともせん是がお親のある娘あらず
 是まくの看病も出来ずもや假墓もある墓増も
 仕ぬ身あがらも終さぬの死小あを採り奉るトりめん
 遠れお孝行めの墓をさる人でもあつくおまくの
 ちあはあぬるふのト墓もま休めふゆりあん

実ら〜く足せうけて死體は此枕かして去て
 香死の子向もは妻のらぬの枕だんごも棺桶も某
 残る清由でまろを小妾れして上るトゆめあら
 何まが後めあ〜妻の付る男の尻髭く指りぐ近
 西を駈まるる合壁の人〜由追り小来りおまから
 悲傷をうめてゆきまゆの乃と終夜枕念外も六字
 清哀れふ〜ゆめくくるま十二因縁の流轉の車の
 庭小ゆらごとくまの林小松がふ似つたぬ〜

人中天上の旨果を食るといふも頼倒迷妄と
 つまみ解挽の種を植ず或いは三途八難の悪報
 お墮落し患ひ小まらされて況ふ世護人のあつども
 と免ふの由の市中の飯食の共弊一物うやらぬ
 夕暮りの重く斯く胡麻平が古身も抱ふるま
 実の情ふあつらも伎力を好く石事人おまきとく
 おまるせて嘆きとれば素より胸中一物の謀計
 あれば錢金の惜まらず大肌税で世結ばし首尾然

昔時礼も渡して七日くの返答もあやうき
 ませなればなきらか飲べいふべうもあはれりある宿
 世縁あつてう郎夫実お世結ばしりりや
 父さぬあてのあつじうと抑りおも玉極めつともあつし
 昔者ハ日己お疎し来者ハ日己お親しと文選に
 九古詩おまらるるかどく胡麻平が今般の情ふあきく
 らい偏ふ父のどくお親しとくれば胡麻平も今人
 人の情あつと飲べ或日ぬそが海うてりの供しと氣

ちのちとそよ〜ト目^め不^ふ會^あ候^まうととあはらみ^らみ^ら
 向^むひア人^{ひと}かん^{かん}け^けおよ^よぬ^ぬめ^めの^のよ^よなる^{なる}十^じを^を又^{また}さ^さ
 せん^{せん}十年^{ねん}の^の末^{まつ}の^のお^お馴^な染^{せん}お^おま^まの^の身^みの^のう^う人^{ひと}も^も令^{しやう}序^{じよ}
 ぶ^ぶの^の馴^な染^{せん}で^で愛^{あい}情^{じやう}の^の産^{うん}で^で子^こよ^よト^ト云^いふ^ふ
 こ^これ^れど^ど基^きん^んさ^さの^の合^が息^{そく}が^が初^{はつ}ず^ずの^の次^{つぎ}お^おる^る風^{ふう}評^{へう}
 の^のひ^ひま^ま〜[〜]と^と切^きる^るを^を云^いふ^ふ弱^{じやく}し^して^て人^{ひと}の^の命^{いのち}も^もで^でも
 拍^{はく}ら^らズ^ずや^や〜[〜]と^とは^は〜[〜]と^と云^いふ^ふが^が日^ひま^まで^で口^{くち}外^{がい}
 も^もあ^あま^まず^ずあ^あふ^ふ使^づく^くあ^あま^まの^の身^みの^のう^うト^ト云^いふ^ふの^のう^うち^ちで^で

抑^{おさ}の^のめ^めて^て指^さま^ま〜[〜]と^と家^い子^{しよ}お^おけ^け妻^{つま}也^{なり}人^{ひと}あ^あれ^れが^が〜[〜]し^して^て
 将^{しやう}も^もあ^ある^るま^まト^ト同^{どう}じ^じに^に〜[〜]の^の壁^{かべ}紙^し公^{こう}お^おを^を〜[〜]
 十^{じゆ}を^を又^{また}さ^さの^の末^{まつ}の^のお^おま^まの^の身^みの^のう^う人^{ひと}も^も令^{しやう}序^{じよ}
 中^{ちゆう}に^に〜[〜]は^は〜[〜]の^のう^うち^ちに^に〜[〜]が^が今^{いま}又^{また}胡^こ麻^ま平^{へい}の^のう^うち^ち
 を^を〜[〜]と^と云^いふ^ふハ^ハト^ト云^いふ^ふ〜[〜]我^{われ}の^の身^みの^のう^うち^ちに^に〜[〜]と^と云^いふ^ふ
 実^{まこと}の^の母^{はは}の^の親^{おや}日^ひも^も忌^い日^びも^も知^しら^らず^ず〜[〜]と^と云^いふ^ふす^すは^は老^{らう}
 の^の母^{はは}あ^あら^ら〜[〜]勿^なし^し〜[〜]と^と云^いふ^ふ〜[〜]ま^ま〜[〜]は^は〜[〜]是^{こゝ}と^と云^いふ^ふ
 育^うち^ちに^に〜[〜]と^と云^いふ^ふ〜[〜]と^と云^いふ^ふ〜[〜]の^のお^おま^まの^の身^みの^のう^うち^ちに^に〜[〜]と^と云^いふ^ふ



お悲しと存じませぬとの字の代をそと出
 中より出す書なすのまづ腋の緒と扱ひのまじく。永
 福七甲子年十一月朔日誕生胡夷孫内娘お櫻
 ごと徳しあるる胡麻平とれをえらうもこのの
 ちお母のおや日苗は名もあるのあれが養父
 いひおひるれどのや昔田上藩する胡夷氏の娘と
 獨り懸死をうりあり又を出すお付ケハさう状の
 るが其汗美赤繩の縁薄しと只今新所い

一の如明白也はらへ何方へ嫁よとの相互ひふ
 送念とくくゆ事羽川おとうとの胡夷孫内を
 徳せし疑ふべしもある我母の名あるべしおのが
 一と巻入書と並のものはト驚く胡麻平のお不
 さらしよ母をゆし〜昔佛の十七年のと死じ女の
 女さぬのおん嫁人をめりくたまさぬと支那の縁し
 を結びしより浅くぬ情おあまうてあかしく

甚くも一子深きを依けんのちの嫉しきあきり
 あく萬年ものめぬ程のあく悪ひ依り
 ちすのむきから嫌よ死すと依り由安穩あきり
 中の怒りくりり鈴女の湯家と小山家と確執
 より領地争ひ其身の親里羽川を庫代
 小山家の旧臣あれが敵方の者と縁ありと主君の
 ちま法士の疑ひ万端をさするものと口惜く
 世にさす道に離縁との由りハさらくを理あきり

由尤せんぞ余存ト上りの一清をくまハ由
 ちんららるる女子ゆは方由一渡一のは是とて
 皆宿世の因縁と共く浮妻を怒りて物不
 以程の石をの湯中あめりせられず謙念は至
 補浩のよ一灰ふらけりりりえ程多ひの
 身よりあどら玉燭のいまあを忘れあきりす
 さあどら小童あきり人の小夜夜恐びあきり
 出仕の際と伺ひ小山の沙館を悪きて斯の如く

坂東唄ばんとううた礼れいふ身みを窄ぢりくは跡あとをあつひりくも何なに
 乗のりあきさらが身みのうは形かたちひり上あまのきき及およ見けん宵よ
 一ひとふ在あてを浮うせふ位くらい一ひと甲こう斐ひもありトけり
 ろふ共ともふ役やくさ可あもサのあまう涙なみだハ胸むね小こ淺あきなり
 子こゆへ迷まよふ私わがの人のちめハ推おし量りょうくまれ
 ぶくハ心こころもくもなきらるり膝ひざをふらふもふは毒どく
 育うのどん偏ひと余あくハ顔かほひり上あまのりもや
 食くも給たまふま乳ちも入いりやすはずは程ほどいりもく

愛あいら〜くは言ことあらがらもあつさぬあつさぬわ出来でき
 中なの俣また又はまた今いま子こハ我わが身みの持ぢ系けい被ひ〜あつせ
 ろもろ其その修しゆ正せい〜庚こう〜府ふ今いま般ぱんをくら入い流りゅうく
 さ〜上あまのり〜中な上あ度たるハ流りゅうのまきどの教くわくく
 縁えん〜を罪つみ深ふかくも云ことの葉は葉はあふ垂あき感かんふ
 愛あいをうりも出い流りゅう〜り〜大だいんぬも親おやをふり捨すて
 古こつをぬれふ孝うやまつある身みのいばらなる死し後のちの妻つま
 のさぬげと知しうつさるぐト是これまぐは道みちまのり

おもひながら身みのうら山やまをけは頼たのひや上かみケのしりへ
 んふ怒いる雲くももそれるまゝしきだよく海川うみありとも
 身を沈しづめ相果あひまりし萬まんく年ねんの末すえうけてりや
 押おのひおきまされぬ時ときもあぶら一遍いつぱんの所ところ手て向むかと笑わら
 る泉いづみのちめて待まちまじびのしりしと流ながれ涙なみだふ袖そで追おり
 ひとふ母ははの対面たいめんの押おのひをあてばと垂たるを縁ゆかり返かへ
 卷まりてその哭なみだむせびをよめて知しるる身みのうらふ胡麻ごま
 平ひらも氣きのぞく鳥とりのうらまされが押おま入いの算はかりたぬら

らあしとも命いのちを捨すてる是こゝろ悟さとのま入いたがはあはれも
 汲ひふらず途とちう中ちゆうで入いるふらるるさうめん運えんのころひ
 不慮ひやうしんるりであらう公こうのまとらふ何なにもあつめひが
 歎なげの妻つまの中なかおやもをこころあひ母ははの身みのうらはよ
 父ちちの身みの名なも見みさぬの名なもなふはしく徳とくあれが
 お尋たづね糸いとちてはやうまををなくお知しるせりし胡麻ごま平ひら
 さん何なにもあま入いる女にさぬの山やまを補おぎなははせりし
 下したさんせしサアをそれ何なにより安やすひるるあがらまの

毒ある家の又六年もせんの子を
 家の小山の判官さぬのふは
 皆散く破乱く 鎌倉の法金鋪
 小山さぬの物とありしが
 小三重を抗むやまうり
 父さぬや兄さぬのお出
 渡れて仕業まうり
 う心の眼あ父さぬや兄

りもあぬ我々の母さぬ中
 念ふお身が抱き心さぬ
 又も涙ふむせうり
 悲しうり

三曲廊日記朝露全傳卷一終

